



イネの防除はこれでイイネ！

－イネカメムシの効果的な防除体系を確立－

開発の背景・ニーズ

近年イネカメムシの多発が全国的に問題となっており、愛知県でも2021年以降イネカメムシが急増しています。イネカメムシは籾の基部を中心に加害し基部斑点米を発生させるほか、登熟初期の加害により不稔を発生させ収量低下など甚大な被害をもたらします。

そこで本研究では、イネカメムシの防除技術の開発に取り組みました。

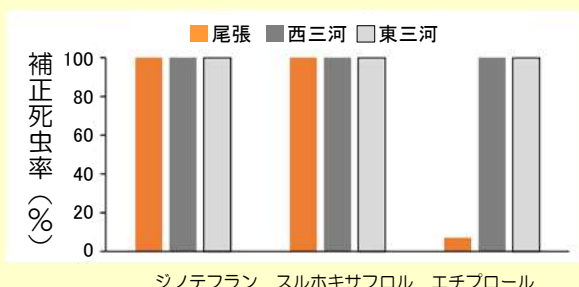


イネカメムシとその被害

成果の内容

イネカメムシが多発している要因を調査したところ、一部地域でエチプロール水和剤の感受性低下が確認されました。これは、長年の同一薬剤の連用によるものと考えられ、感受性低下を防ぐには、複数薬剤による防除体系が必要であることが分かりました。

さらに、水稻の収量に直結する不稔被害を防ぐためには出穂期の成虫防除が重要であり、特に、ジノテフラン水溶剤とスルホキサフロル水和剤を組み合わせた出穂期及び出穂期の7～14日後の2回防除により被害を抑えることができました。



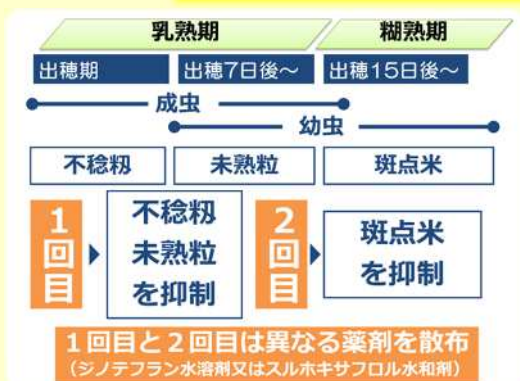
主要薬剤の感受性検定
(各地域から採取した成虫個体、2023)

	不稔籾	未熟粒	斑点米
ジノテフラン水溶剤	◎	◎	◎
スルホキサフロル水和剤	◎	○	×
エチプロール水和剤 (一部地域で感受性低下)	◎	×	△

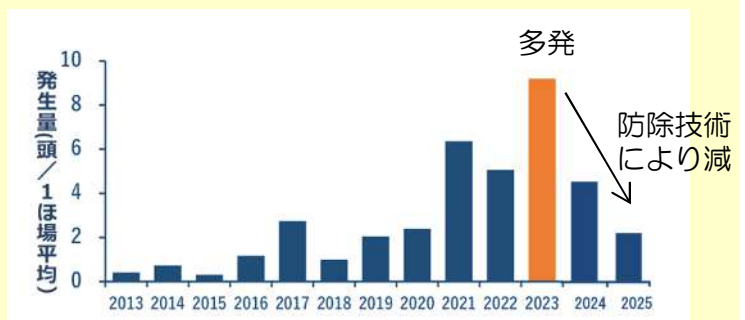
◎効果高い ○効果ある △効果あるが低い ×効果低い

薬剤散布によるイネカメムシ被害抑制効果
(出穂期と出穂7日後の2回散布の結果(場内調査、2023))

同一薬剤を連用すると感受性低下のリスクが高まる



薬剤散布による防除体系



イネカメムシ発生量の年次推移

(本田すくい取り調査における調査ほ場あたりの平均年間捕獲頭数(発生予測結果より))

愛知県農業への貢献

出穂期及び出穂期の7～14日後の2回防除を適切に行うことで、イネカメムシによる水稻の収量・品質低下を防ぐことができ、生産者の経営安定に寄与します。